

平成8年度イセエビ放流技術開発事業（抄録）

高木俊祐・天真正勝

将来のイセエビ人工種苗放流の可能性に鑑み、本種の初期生態等を明らかにする目的で調査を実施した。ここではその概要を記す。なお、本事業の詳細については平成8年度放流技術開発事業（基礎技術開発グループ）報告書を参照されたい。

プエルルス幼生および稚エビコレクター調査

由岐町由岐地先湾において7定点を設けてキンランタタイプのコレクターを設置した。この他日和佐町内に1定点を設け、5月10日～12月26日の間、延べ270回採集調査を実施した。その結果合計96個体のプエルルス幼生、9個体の初期稚エビが採集された。今年度の採集ピークは昨年より1週間程遅れて7月16日にみられたが、その後秋期の2回目のピークがみられずほとんど採集されなかった。

プエルルス幼生の予備的飼育試験

96年7月7日由岐町で採集した24個体を飼育したところ、97年1月には平均頭胸甲長40.7mm、平均体長120.9mm、平均体重62.7gとなり、最大の個体では体重103.5gに達した。生残率は50.0%であった。性別については96年9月には交接器が確認され、メスは33.3%となった。96年度採集群については5、6月採集群、7、8月採集群および10～12月採集群の3群に分けて飼育した。5、6月採集群と7、8月採集群の成長に大差はなく、この程度の着底時期の差はその後の成長あまり影響しないことが予想された。また前年度採集群よりもかなり高い成長を示したが同群は餌料（魚類主体）が不適切であったことが主な原因と思われた。

潜水によるプエルルス幼生および稚エビの観察・採集調査

前年度調査で採集の見られた牟岐地区および新たな調

査ポイントである宍喰地区で7～12月の間延べ12回調査を行った。今年度から採集にはKcl飽和溶液を用いた。合計プエルルス幼生2個体、初期稚エビ8個体、稚エビ3個体が採集され、今年度に入って漸くプエルルス幼生を採集できた。7月の調査時にはコレクター調査による着底ピーク時にもかかわらず、確認数が少なく、調査ポイント、手法に改善の余地があることが予想された。

稚エビ標識放流調査

11月20日、日和佐地区で漁獲された稚エビ421個体に個体識別標識を施した後放流した。標識はチューブ型アンカータグを用いたが、摩滅と損傷を防ぐため、チューブ部を透明ビニル膜によりコーティングしたものを用いた。当群の再捕は春漁期以降となるものと思われる。前年度放流群は96個体が再捕され、再捕率25.0%となった。

稚エビ飼育試験

標識の脱落状況、死亡、成長等を明らかにする目的で前項放流群のうち40個体を同時に標識して飼育を開始した。当群は標識日に1個体（2.5%）の死亡が確認された。

胃内容物調査

小型エビ50個体（平均頭胸甲長43mm）の胃内容物を調査した結果、軟体動物（腹足類、二枚貝）、棘皮動物（クモヒトデ類、ウニ類）、節足動物、環形動物などが主に捕食されていた。

フィロゾーマ幼生調査

調査船（67トン）により稚魚ネット調査（2定点、1回/月）を行った。その結果、6、7、8月に初期幼生26個体、8月にイセエビ属中期幼生1個体、6、9、10月にセミエビ科の初期～後期とみられるフィロゾーマ幼生5個体が採集された。